

松下記念病院の医師が解説！



日本救急医学会救急科専門医
日本集中治療医学会集中治療専門医
インフェクション・コントロール・ドクター(ICD)
堀 雅俊先生

新型コロナウイルス 今わかっていること

本当にオミクロン株は怖くない？

比較的軽症といわれるオミクロン株ですが、以下のデータの通り**60歳以上の重症化率は季節性インフルエンザの約3倍**のようです。

	重症化率	
	60歳未満	60歳以上
新型コロナ・オミクロン株流行期	0.03%	2.49%
新型コロナ・デルタ株流行期	0.56%	5.0%
季節性インフルエンザ	0.03%	0.79%

第90回新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボード資料より

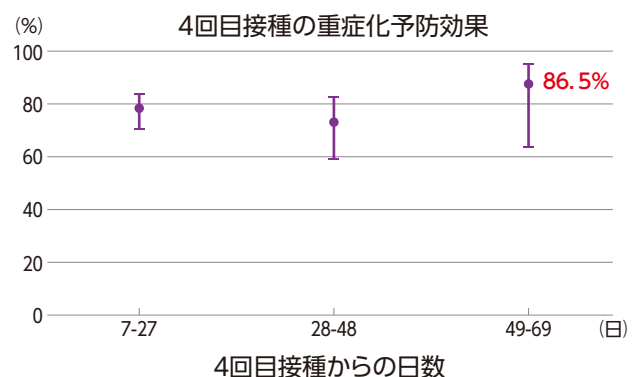
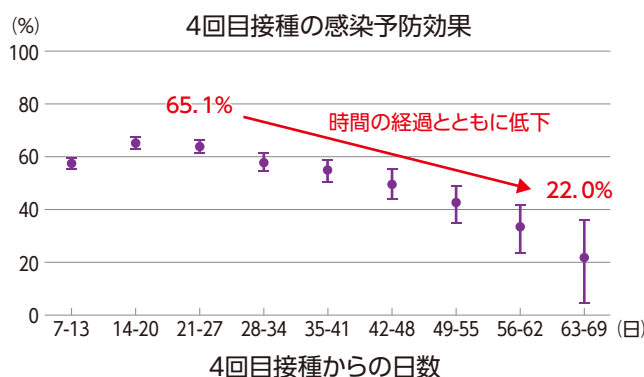
オミクロン株も含めて、やはり「コロナはただの風邪ではない」と感じさせられます。



4回目ワクチンの効果は？

前号でお知らせした、60歳以上のワクチン「3回目接種から4カ月以上経過した人」と「4回目接種した人」を比較したイスラエルでの研究の続報です。

感染予防効果は3週目に65.1%となったのをピークに下がりはじめ、10週目には22.0%まで低下してしまいました。一方、重症化予防効果は4回目接種から10週後も86.5%と高い水準を維持していました。



BMJ 2022; 377より

オミクロン株に対応するワクチンは期待できる？

従来のワクチンは、デルタ株などに比べてオミクロン株に対してはやや効果が劣ることが報告されてきました。そこで**従来株とオミクロン株BA.1の両方に対抗するワクチン(2価ワクチン)が開発され、その接種が開始される見込みです。**

この2価ワクチンは、オミクロン株BA.1に対する効果(接種後の中和抗体価)は従来のワクチンに比べて1.5～2倍ほどといわれますが、一方でBA.4やBA.5に対しては少し効果が落ちるおそれがあることも指摘されています。

オミクロン株には免疫を回避する特性があるため、

ワクチン接種のみでは感染予防は困難だと感じます。手洗い・消毒や人と接するときのマスクなど、基本的な感染対策で予防しましょう。

一方、重症化予防効果は、従来のワクチンでも、おそらく新しい2価ワクチンでも十分に期待できます。新しいワクチンに期待を寄せたいところですが、以前のような予約殺到も懸念されるので、最後の接種から6カ月以上経っている方は、新しいワクチンを待って先延ばしにするのではなく、**すぐに接種可能なワクチンを打つことも検討したほうがよいでしょう。**

子どももワクチンを打った方がよいの？

5～11歳の小児も、新型コロナウイルスワクチン接種について「努力義務」が適用されました。四種混合(DPT-IPV)、麻しん、風しんなどの定期接種と同等の推奨ということです。

また、**日本小児科学会も本年8月10日付で「5～17歳のすべての小児に新型コロナワクチン接種を推奨する」と発表しました。**

小児は感染した場合も重症化はまれとされていますが、少数ながら死亡例が報告されています。ワクチン接種によって重症化が40～80%ほど予防でき、一方で、ワクチンの副反応は12～17歳では若年成人と同等程度で、5～11歳ではより少ないということがわかってきました。

これらのことから、デメリットよりメリットが大きいと判断され、推奨されることとなったようです。

ただし、あくまでも「努力」義務であり、強制ではありません。

「何となく怖いから」とか「周りの人が打つから」ではなく、**効果や副反応のメリット・デメリットを本人と保護者がよく理解して、「接種すべきかどうかを吟味する努力」が大事**なのではないでしょうか。



インフルエンザはもう流行しないの？

例年猛威をふるうインフルエンザですが、2020～2021シーズン、2021～2022シーズンはほとんど流行しませんでした。

マスクなどの感染対策や渡航者の減少などが影響した結果と考えられていますが、2022年初夏よりオーストラリアをはじめとして世界のあちこちでインフルエンザの患者が発生しています。**規制緩和や屋外でのマスクなしなど、感染対策への意識が下がることで日本でも次の冬はインフルエンザの再流行があるかもしれません。**



症状に対する注意、手洗い、必要に応じたマスク着用、そしてインフルエンザワクチンなど、特に高リスクの方は対策を講じておくのがよいでしょう。